



TITLE:

戦後の獨逸の労働市場

AUTHOR(S):

山本, 美越乃

CITATION:

山本, 美越乃. 戦後の獨逸の労働市場. 經濟論叢 1920, 10(4): 562-566

ISSUE DATE:

1920-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127644>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第十卷 第四號

大正九年四月一日發行

論 說

勞賃の經濟的及び道德的性質(一)……………法學博士 田島 錦治

酒の政府專賣と公益……………法學博士 神戸 正雄

鎌倉時代の家族制度(三)……………文學博士 三浦 周行

明治の米價調節(六)……………法學士 本庄榮治郎

經濟學不進步の原因に就きて……………法學士 石川 興二

所得稅均等負擔の理想と實現(二完)……………法學士 汐見 三郎

時事問題

現代方便生活と社會の問題……………法學博士 戸田 海市

雜 錄

戰後の獨逸の勞働市場……………法學博士 山本美越乃

諸國行政統計書の梗概(一)……………法學博士 財部 靜治

手形交換所制度論(二)……………法學士 大森 研造

雜 錄

戰後の獨逸の勞働市場

山本美越乃

戰後獨逸の產業的活動の恢復力如何は、世界各國の等しく興味を以て注意しつつある所にして、其の前途に對する豫測は、固より資本勞力及原料の供給等に關する周到なる研究の結果を俟つに非ずんば、遽かに之を推斷すべからざるものあり、資本及原料の供給問題に對する考察は之を他日に譲り、茲には獨逸國會議員・Georg Gotheim の觀察を基礎として、戰後獨逸の勞働市場に於ける勞力の需給狀態の豫測の一端を紹介せんと欲す。

今次の大戦の爲めに獨逸國內に於て最も活動力に富める十九歳以上四十九歳以下の青年及壯年者の、或は戦死し、或は負傷し、或は然らずとも召集に應じて兵役に服したるが爲めに、專

第十卷 (第四號 一〇八) 五六二

門的に職業を練習する機會を逸したる者の數は、約三百萬人に達し、假令第三種の階級即ち兵役の爲めに職業練習の機會を逸したる者を除くも、尙は壯年勞働者を失ふこと約二百萬人の多きに及び、加ふるに講和條約の締結は、更に從來國內に抑留して諸種の產業殊に農業に従事せしめたる、二百數十萬人の俘虜及外國人を解放せしめ、從て彼等の勞力をも亦之を利用するを得ざらしむるに至れり。

戰前獨逸に於て使傭したる外國勞働者の數は八十五萬人を下らざりしが、彼等の多數は開戦と同時に獨逸國內に抑留せられたるも、今や彼等の本國に於ては勞力を要すること大なるものあり、殊にポーランド人の如きは懷郷の念切なるより、再び獨逸に歸來するが如きことは多く之を期待すべからず、此の如き事情の下に獨逸國內に於ける主要なる產業に就きて、勞力の分配狀態を豫想せば、

(一) 農業、農業上の勞力殊に大中農地に使傭せらるべき農業勞力は、著しき不足を告ぐべきは疑

を容れず、固より從來農業及林業に従事したる者にして、講和の結果除隊又は免役となれる者は當然其の業に復すべく、又各種の工業に使用せられたる労働者にして、工業原料の不足の爲めに其の職を得ずして、新たに農業労働に轉せんとする者も尠からざるべしと雖も、單に之のみを以ては未だ農業勞力の缺亡を補充し得て餘りありと言ふを得ず、一九〇七年に農業及林業に使用せられたる男子の労働者は約五百二十八萬四千人なりしが、一九一三年には既に五百二十萬人以下に減じ、然かも其の中約二百五十萬人は兵役に服したるを以て、假令講和の結果彼等の一部は歸還農業に従事するも、到底勞力の不足は免る能はざるべし。

(二) 鑛業、一九一三年に於ける鑛業労働者の數は、約百十八萬九千七百人(内成年男子の労働者は約百十三萬三千七百人)なりしが、戰時中は俘虜抑留外人及ボーランド人等を使用して採掘を繼續したるも、勞力の缺乏の爲めに新坑の採掘に着手すること能はざるは勿論、在來の坑

區と雖も到底平時の平均產額を出だす能はざるが如き狀態に存したり、而して這は啻に石炭のみならず粗鐵・加里等に付きても亦同様なりとす、然るに戰後此の方面に於ける勞力の需要に對しては、補充の見込未だ確立せざるが如し。(三) 製鐵業、若し過去に於けるが如くに豊富なる原料を自由に利用するを得ば、此の方面に於ても勞力の需要は頗る大なるものあるべしと雖も、原料の供給問題に關して豫測し得べからざる現状の下に在りては、勞力の需要の程度に付きても之を推知すること難し。

(四) 陶磁器・硝子・石及土工業、一九一三年に此の種の工業に従事したる労働者の數は、約六十四萬七千六百人(内成年男子の労働者は五十三萬七千〇八十餘人)なりしが、是等の工業中殊に陶磁器及硝子業に付きては國內及國外の需要甚だ大なると、其の原料を他國に仰ぐの必要なく、且資本を要することも亦多からざるより、戰後生産能力の恢復も比較的速かなるべく、從て此の方面に於ける勞力の需要の大なるべきは明か

なりとす。

(五)金屬工業、金屬工業及機械器具等の製造業に使傭せられたる勞働者の數は、一九一三年には約百八十五萬三千五百人(内成年男子の勞働者は百五十二萬八千五百人餘)に達したり、而して戰時中は一時軍需品の製造に轉用せられたる此の種の工業も、戰後は産業復員の結果徐々に舊態に歸らんとし、之が爲めに多數の勞働者を要するの傾向あるのみならず、農工業及交通運輸業等に必要なる機械器具類の如きも、戰時中は修繕に次ぐに修繕を以てし、殆んど完全なるものなしと稱するも不可なき狀態に在りしを以て、單に之が更新の作業のみにても多くの勞力を要すべきは想像するに難からず、尤も此の種の工業には戰時中比較的多くの女子勞働者使傭せられ、従て多少の經驗を有せる女子は、今後と雖も尙ほ男子の勞力の缺乏を補ひ得ざるに非ず、然れども又他方に於ては歸還兵及除隊者等の結婚數も増加すべきが故に、女子勞働者中には勞働市場より脱退して、新たに家庭の人とな

る者も決して少からざるべく、加ふるに將來織物工業の復舊に伴ひ、女子の多くは此の方面に吸収せらるべきは明かなるを以て、何れの點より考察するも、金屬工業に於ける勞力の不足は疑ふ可からざるなり。

(六)化學工業、一九一三年に化學工業に従事したる勞働者の數は、約十八萬〇六百人(内成年男子の勞働者は約十四萬六千人)なりしが、獨逸の化學工業は他國の追隨を許さざる所なるを以て、戰後は啻にアニリン染料及製藥業等に於て再び世界的の需要を喚起するに至るべきのみならず、更に戰時中の研究に成れる新化學工業品(例へば窒素肥料の如き)に於ても、世界の市場に潤歩し得べき見込充分なるものあり、故に化學工業的の方面に於ける勞働者の需要は、戰前に比して一層増加するに至るべし。

(七)紙工業、一九一三年に紙工業に使傭せられたる勞働者の數は、約二十萬人(内成年男子の勞働者は約十一萬五千人)を算せしが、戰爭の爲めに製紙原料殊に木材・石炭・樹脂等の缺乏は、

該工業を縮少するの止むなきに至らしめたるも、戦争の終結と共に是等の原料の供給に餘裕を生じ來れるを以て、今後は徐々に舊態に復すべく、從て歸還兵士等は此の方面に於ても職業を求むること敢て困難にあらず。

八木工業、此の種の工業に従事したる労働者の數は、一九一三年には約四十五萬四千人（内成年男子の労働者は約三十八萬三千人）に達せしが、戦時中は家具類の製作及各種の指物業の如きは、一時休止の状態に在りしも、戦後は是等の木工業の繁忙を極むべきは想像するに難からず、殊に家具類に至りては、現今は古物と雖も戦前の價格の二倍以上に騰貴し、需要頗る大なるに拘らず供給之に伴はざるを以て、今後此の方面に多くの勞力を要すべきは疑を存せず、這是獨り家具類に付きてのみならず、一般の建築業に付きて亦同様にして、戦時中は家屋の修繕すら之を延期し來りたるも、今や修繕は勿論新築の爲めにも多くの勞力を必要とするに至れり、要するに木工業の前途は洋々として、毫も悲觀

の材料を認め得べからざるを以て、勞力の過剰よりは寧ろ其の缺乏を憂ふるに至るべきや明かなり。

九皮革及織物業、是等の諸業も亦早晚舊狀に復するに至るべきは疑を容れずと雖も、戦後直ちに其の恢復力を發揮し得べきや否やは、多少考慮の餘地なしとせず、蓋し皮革業は其の原料たるべき生皮及鞣皮材料國內に豊かならざるを以て、是等の原料を輸入するには相當の時日を要すべく、又假令相當の時日を與ふるも、戦争の爲めに皮革の需要極度に増加したる結果は、生皮の供給を世界的に減少せしめたるを以て、該工業を戦前の状態に恢復せしむるは容易の業に非ざるべく、一九一三年には皮革業に従事したる労働者の數は約十二萬一千人（内成年男子の労働者は約九萬一千五百人）なりしも、戦後此の方面に於ける勞力の需要に付きては全く豫測の外に在り、此の事情は織物業に關しても亦略ば相似たるものあり、即ち獨逸は自ら羊毛・棉花・麻等の織物原料を産せざるのみならず、羊毛

及棉花の如きは世界的の産額すら既に充分ならざる状態に在るを以て、戦後直ちに製織能力を恢復し得べしと想像するを得ず、一九一三年に獨逸の織物業に従事したる労働者の數は、約九十五萬六千人(内成年男子の労働者は約四十萬人)なりしも、戦後は斯く多數の労働者を一時に收容することは困難なるべし、従て被服工業の如きも其の影響を受け、新規調製よりは寧ろ修繕又は代用品の製造を増加すべく、戦前即ち一九一三年に該工業に従事したる者の數四十三萬一千人(内成年男子の労働者は十一萬二千人)に達したるが如き盛況は、近く之を期待し得べからざるに似たり。

要之、戦後の獨逸の労働市場は、工業の種類に依りては前述の如くに勞力の需要頗る大にして、供給之に伴はざるが如きものあるべしと雖も、又或種の工業に於ては原料の不足の爲めに勞力の需要も大ならざるの結果、其の供給に餘力の存するものあるべく、是等兩者を平均せば工業能力に於ては需給の均衡を保ち得ざるに非

ずと雖も、農業勞力に至りては明かに缺乏を告げ、之が補充は將來に於ける一大問題と稱せざるを得ざるなり。